様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　８ 月 ２９ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ０２８１４

研究課題名（和文）教科の本質を問い汎用的スキルに迫る家庭科教員養成カリキュラムに関する研究

研究課題名（英文）A Study on Home Economics Teacher Training Curriculum that Questions the Essence of Subjects and Approaches General-Purpose Skills

研究代表者
鈴木　明子（SUZUKI, AKIKO）

広島大学・人間社会科学研究科（教）・教授

研究者番号：９０２２０５８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：H大学のカリキュラム試案を検討，改善することを通して，家庭科の本質を問い汎用的スキルとの関係に迫る教科観を育成するための中等家庭科教員養成カリキュラムの仕組みや在り方について探究した。３年間を通して，情報収集とカリキュラムの構想，改善，分析を行い，教科の本質及び資質・能力と汎用的スキルとの関係等を追究し，教科教育と教科内容の 架橋の課題など，背景理論と課題の整理を行った。その結果，教員養成時期に，生活の成り立ちとその変化を捉える視点をもたせること，生活者育成に係る独自の教科枠組みの重要性を理解させることが重要であるという示唆を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の独自性は，特定組織のカリキュラムを，客観的に評価できる他大学の研究者らとともに検討することによって，家庭科カリキュラムの構成原理の一端を探るという帰納的な方法論をとる点にある。また，背景学問としての家政学と家庭科教育の関係，及び教科教育と教科内容の架橋原理を探るため，家政学原論，家庭科教育学，教科内容学担当者の三者が協働して研究を進める点に創造性がある。家庭科教育の意義を教科の本質と汎用的スキルとの関係において追究し教科観を育てる教員養成カリキュラムの提案は，家庭科教員の質を保障するとともに，家庭科の目標構造や学習内容の体系，学習観や教授方略を再考することにも役立つと考える。

研究成果の概要（英文）：Through the examination and improvement of the draft curriculum of University H, we explored the structure and modalities of the secondary home economics teacher training curriculum in order to cultivate a sense of subject that questions the essence of home economics and approaches the relationship with general-purpose skills. Throughout the three years, we collected information, conceived, improved, and analyzed the curriculum, pursued the relationship between the essence, qualities, and abilities of the subject and general-purpose skills, and organized background theories and issues, such as the task of bridging subject education and subject content. As a result, it was suggested that it is important to have a perspective that grasps the origins of daily life and its changes during the teacher training period, and to make students understand the importance of a unique curriculum framework related to the development of consumers.

研究分野：教科教育学（家庭科教育学）

キーワード：家庭科　教員養成　カリキュラム　教科の本質　汎用的スキル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

新学習指導要領（2017）では，汎用的スキル（コンピテンシー）と教科固有の資質・能力の２視点を相互に関連付けながら明確にすることが重視されている。その際，各教科の本質を教育課程全体の中で捉えなおしていくことの重要性が注目されているところである。家庭科は，その教科内容が，人文，社会，自然の諸科学と関係しており，同時に生活技能習得も求められるがゆえに，背景学問を規定することが難しい教科であることは否めない。諸科学の理論と実践を統合する科学である家政学の理論を踏まえて教科の本質を捉えることは，汎用的スキルの獲得に家庭科がどのように貢献できるのかという命題にアプローチすることでもある。

そのためには，教員養成においても教科の本質を理解する科目と教科内容科目の在り方を問う必要がある。家庭科教員養成における本物の文脈での学びとは，専門諸科学の研究成果を事実的知識として学ぶことにとどまらず，それらを根拠として明らかにされる人間生活の有り様や，環境との相互作用の仕方を，多様な条件・状況の中で吟味し選択していく文脈での学びである（鈴木，2018）。その学びは他教科に比べて汎用的スキルにアプローチしやすい特質をもっている。しかしながら，その独自の学びやアプローチを可能にする展開が見られるカリキュラム例は少ない。

このような背景と問題意識に鑑み，代表者らは2014年から現在まで所属大学（H大学）の家庭科教員養成カリキュラムの検討，改善を続けてきた。本研究の核心をなす学術的「問い」は，「なぜ家庭科を学ぶのか，その認識を教科の本質と汎用的スキルとの関係を問いつつ充分に育てることができる家庭科教員養成カリキュラムに必要な要件は何か？」であった。

２．研究の目的

そこで本研究では，このような力を育む家庭科教員養成カリキュラム試案を考案し，家庭科教員養成に係り多様な専門性をもつ複数の大学の教員で協議・検討を繰り返し，カリキュラムづくりの要点を整理し発信することを目的とした。

３．研究の方法

そのために，カリキュラム検討のための理論モデル及び課題（案）（図１）に基づき，家政学および家庭科教育学及び家庭科内容学の専門家12名で「０試案」を構想，実施・検証し，改善のための課題を見いだすことを試みた。

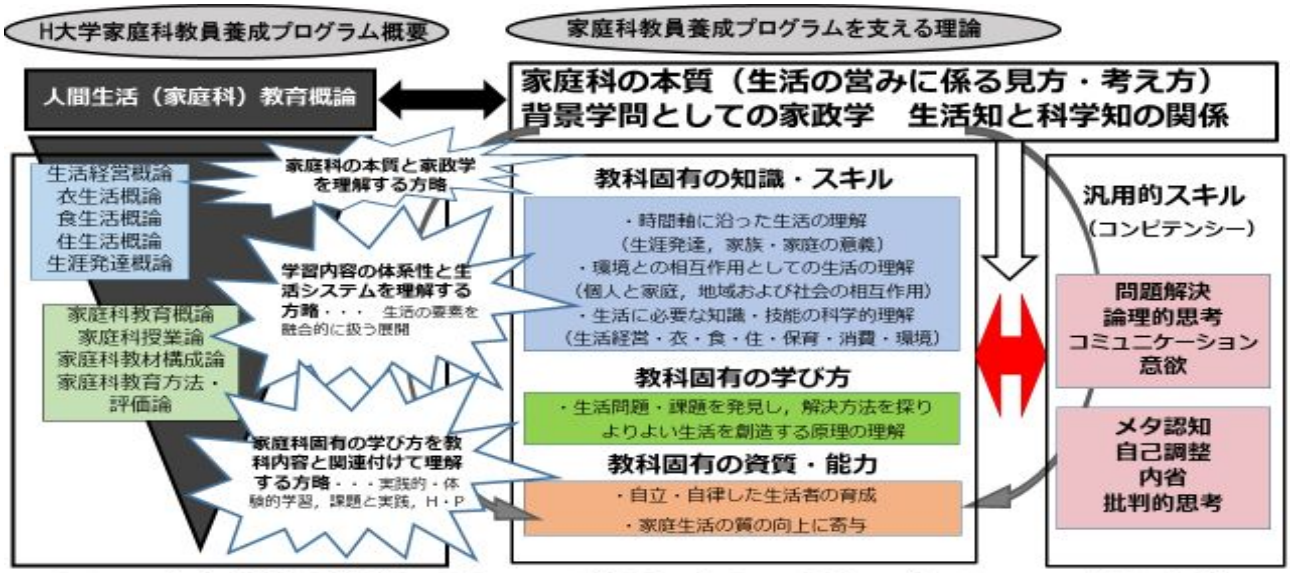

図１　家庭科教員養成カリキュラム検討のための理論モデルと3つの課題（案）

図１の中央及び右部分では，教科固有の知識・スキル，学び方及び資質・能力が汎用的スキルと往還しながら獲得されていくこと，双方を結び付けているのが，教科の本質としての見方・考え方であり，家政学の学問的特徴であることを示している。またその見方・考え方は，カリキュラムを通しての学びや汎用的スキルの訓練の中で鍛えられ，教科固有の資質・能力を高めていくことにもつながる。また，教科固有の学び（図１中央部分）を目指して遂行されるカリキュラム（図１左部分）における主な課題として，「家庭科の本質と家政学を理解する方略」「学習内容の体系性と生活システムを理解する方略」「家庭科固有の学び方を教科内容と関連付けて理解する方略」の３点を挙げ，カリキュラム改善の要点とした。

４．研究成果

（１）20191020（日）鈴木科研シンポジウムのプログラムと成果

プログラムは，●趣旨説明（鈴木），●パネリスト話題提供　○工藤「家庭科の“共通知”をつくる－家政学原論からの発言－」，○正保「家政学研究から捉える家庭科のユニークさと固有の学び方」，○岡「汎用的能力からみる家庭科固有の資質・能力と学び方」，○佐藤「家庭科の本質を踏まえた<教科教育と教科専門>のコラボレーション」，○平田「教科内容学の観点からみた家庭科のあり方」，●トークセッション（質疑応答）であった。以下，シンポジウムの成果として，202005日本家政学会発表要旨を記す。

教科観の構築を目指す家庭科教員養成カリキュラムに関する研究－シンポジウム参加者の認識から捉える課題の整理－

【目的】家庭科の意義が子供たちに伝わりにくい要因の一つとして教科観の確立の弱さが挙げられる。本研究では，教員養成課程で自己の教科観を構築する重要性を認識できるカリキュラムの考案を目指す。本報告では，本研究に関連して開催したシンポジウム参加者の認識をとおして課題を捉えることを目的とした。

【方法】2019年10月，広島大学にて，家庭科教育，家政学諸分野で異なる専門性をもつ５名をパネリストとするシンポジウムを行った。企画段階で，家政学と家庭科教育，理論と実践，指導方法と内容，汎用性と固有性など，異なる視点で課題を捉えられるよう構想した。終了後，参加者への質問紙調査を行い，家庭科教員養成の課題，教科観育成の重要性，家政学と家庭科の関係性への気づきなどについて回答してもらった。

【結果】パネリストとコーディネーターを除く参加者は51名（大学教員，指導主事，中高校長，家庭科教諭，学生等）であった。各パネリストから提示された課題は，「家庭科の共通知の必要性」，「家庭科の固有性，資質・能力」，「教科専門（内容）の在り方」などであった。調査票回収率は84.3%であり，回答者43名中41名が家庭科教師の能力や教員養成段階の課題を捉える上でパネリストが提示した情報や課題を自分の課題と結んで認識を深めていた。また，42名が家庭科の教科観の重要性を認識し，37名が家政学と家庭科の関係性についての気づきがあったと回答した。

（２）20201122（日）鈴木科研オンライン情報交換会（ZOOM）プログラム

①家政学会第72回大会のポスター発表内容の報告（梶山，鈴木）【家庭科教員養成カリキュラムに関する研究（2020家政学会ポスター】

②日本教科内容学会出版書における家庭科内容構成の提案と批評（平田，工藤，佐藤，質疑応答）【家庭科の仮説の説明とシラバス修正版;第7回大会課題研究学会発表資料・平田他）】

③広島大学教育学研究紀要（現在校正中）の報告（衣・食・住概論）（鈴木，村上，松原・冨永，高田，金崎，質疑応答）【研究科紀要（0929提出版）】

④日本家庭科教育学会第4次課題研究（国立大学法人大学の中等家庭科教員養成の実態）（鈴木）【課

題研究2　1-A教員養成；課題研究2　1-B教員養成；20191125 例会資料】
⑤英国impact社のネット記事（鈴木）【000_000_Akiko Suzuki_Impac~1.pdf】
⑥中等家庭科教員養成カリキュラム全体の方向性と課題について意見交換（全員）

（３）カリキュラムの成果と課題（２つの報告より）

①広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討―衣・食・住生活概論の構想と成果―広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第１号(2020)

要約　広島大学教育学部人間生活系コースの家庭科教員養成カリキュラムの再構想のため，2019年度から改訂したカリキュラムにおける教科専門科目を検討した。そのなかで2020年度前期に開講された「衣生活概論」,「食生活概論」「住生活概論」の構想を関連の学問体系とともに示した。また，実際に授業を行い，各概論受講前後の学生の生活観，教科観等の変容を調査によって捉えた。さらに，教員が捉えた授業の成果と課題に基づいて，次年度以降の各概論の改善の方向を探った。各概論の受講者は，自分自身や現代社会における衣生活，食生活，住生活の課題をイメージできるようになった。その要因として，パフォーマンス課題を設定して主体的な学びを促したこと，グループディスカッションや体験活動を通して，生活課題認識を広げ深められたことなどが考えられる。また，背景学問である家政学と当該専門諸科学との関係性を概念図として示すことによって，家庭科の背景学問の構造を理解させることができた。

②広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討―人間発達概論の構想と成果および家庭科内容構成の展望―広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第２号(2021)

要約　2019年度入学生から改訂したカリキュラムにおける教科専門科目のうち，2020年度後期に開講された「人間発達概論」の構想を関連の学問体系とともに示し，前報の３つの概論と合わせて，4つの各概論受講前後の学生の生活観，教科観等の変容を調査によって明らかにした。また，授業者が捉えた授業の成果と課題，および日本教科内容学会のプロジェクトに関わって，コースメンバーで提案した7つの仮説に基づいて，今後の各概論の改善の方向を探った。４つの各概論受講後の共通の成果として，家政学と当該専門諸科学との関係性を強調したことによって，教科（家庭科）の内容は，学問ベースで構成されていることを理解させることができ，その学問として，家政学を認識していることを確認できた。また，今後履修することになる専門科目の学びや家庭科教育の意義を考えることに結びつけようといていることも確認できた。日本教科内容学会のプロジェクトにおける家庭科内容構成への提案から得られた教員養成コースカリキュラムの工夫・改善への示唆は，家庭科の認識論的定義を教員養成組織で共有すること，その定義に基づいて，内容の専門性を問い，再構成することであった。

（４）対面シンポジウムとオンラインによる情報交換会の成果と課題

広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討―多様な家政学専門家の意見に照らした課題と展望―広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第２号(2021)

要約　家庭科の本質やその教員養成の課題に関する多様な家政学専門家の意見を得るために，対面シンポジウムとオンラインによる情報交換会を行った。それらへの参加者の記録から，家庭科教員養成カリキュラムへの示唆を得て，今後の研究への展望を図ることを目的とした。その結果，多様な立場，履歴をもつ教員が協働して家庭科の本質や教員養成の方法について考える２つの場を通して，各参加者は少なからず刺激を受け，自分の家庭科教育への思いをみつめた。また，教職に関わる者として，あるいは生活者としての今後の歩み方への指針を得たことが見て取れた。教員養成カリキュラムにおいては，生活の成り立ちとその変化を捉える視点をもたせることと，変化する教育課程の中で，生活者育成に係る独自の教科の枠組みの重要性を理解させることが要点である。

（５）20220129-0305鈴木科研シリーズオンラインミニディスカッション鈴木科研の主旨とプログラム及び成果

これまでに得た示唆は，①教科観を明確にもたせること，②教科の内容構成を問い直すこと，③学校のカリキュラムマネジメントをイメージして，家庭や地域と連携し，生涯学習の視点をもつような展開を工夫することであったが，これらの３点を踏まえて，本科研の総括として，研究分担者が各専門の立場から本科研テーマに関わる課題を改めて提起し，参加者とともに，これからの家庭科とその教員養成の在り方について，ディスカッションを行うことを目的とした。全７回のディスカッション全体を通して考えたい問いは，「家庭科の本質と汎用的スキルとの関係」家庭科の本質からみた資質・能力とは何か？それは汎用的な（教科共通の）資質・能力とどのように関わるのか？，「家庭科教員養成の課題」その資質・能力を教員養成課程で培うために必要なことは何か？　であった。
プログラムは，●第１回 1月29日（土）「家庭科の本質と汎用的スキルとの関係」（鈴木），「学校のカリキュラムマネジメントの課題と家庭科の立ち位置」（佐藤），●第２回 2月 5日（土）「生活経営学の教育・研究から考える家庭科教員養成」（平田），●第３回 2月12日（土）「衣生活内容の教育・研究から考える家庭科内容構成と教員養成」（村上），●第４回 2月19日（土）「家族にかかわる社会問題からバックキャスティングして「生活自立」「家庭の仕事」を学ぶ意義を考える」（正保），●第５回 2月22日（火）「汎用的資質・能力から見る家庭科教育の可能性」（岡），●第６回 2月26日（土）「現代の課題を“家庭科”としてどう読み解き， 共有し，子どもたちに伝えるか」（工藤），●第７回 3月 5日（土）「家庭科教員養成の課題と展望」 （鈴木）であった。全７回の参加者は91名であった。ディスカッションで焦点を当てたキーワードに基づいて，次の５つの家庭科教員養成の課題を抽出することができた。①認識論的に，リアルで多様な社会現象を理解すること，②指導スキルとしては，指導対象である学級とか個々の子どもの生活リアルを捉えて，適切な指導方法の工夫を行うこと，③家庭科の教科の枠組みの中で何ができるか・できないかということを考える必要性，④校種別の指導の有効的使用，⑤汎用的教科内容学の必要性であった。

Ｈ大学のカリキュラム試案を検討，改善することを通して，家庭科の本質を問い汎用的スキルとの関係に迫る教科観を育成するための中等家庭科教員養成カリキュラムの仕組みや在り方について探究した。これらの知見から，大学での家庭科教員養成時期に，生活の成り立ちとその変化を捉える視点をもたせること，生活者育成に係る独自の教科の枠組みの重要性 を理解させることが重要であるという示唆を得た。また，改善カリキュラムにおいて，家政学と当該専門諸科学との関係性を強調したことによって，教科（家庭科）の内容は，学問ベースで構成されていることを理解させることができ，履修者は，その学問として，家政学を認識していることを確認できた。その後履修する専門科目の学びや家庭科教育の意義を考えることに結びつけようといていることも確認できた。今後も関係者で協働体制を構築できることを期待しながら具体的なカリキュラム開発を続けていきたい。

本研究の独自性は，特定の組織の現状を前提としたカリキュラムを，それらの成果と課題を客観的に評価できる他大学の研究者らとともに検討することによって，家庭科カリキュラムの構成原理の一端を探るという帰納的な方法論をとるところにあった。また，背景学問としての家政学と家庭科教育の関係，及び教科教育と教科内容の架橋原理を探るため，家政学原論，家庭科教育学，教科内容学担当者の三者がそれぞれの専門性や研究実績に基づき協働し，理論と実践成果に関する意見や情報を共有しつつ協議する点に創造性がある。

家庭科教育の意義を教科の本質と汎用的スキルとの関係において追究し教科観を育てる教員養成カリキュラム提案は，家庭科教員の資質を保障するばかりではなく，家庭科という教科の目標構造や学習内容の体系，さらには学習観や教授方略を再考することにも役立つと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 鈴木 明子 ，金崎 悠 ，村上 かおり ，冨永 美穂子 ，松原 主典 ，髙田 宏 ，今川 真治 ，梶 山 曜子 ，平田 道憲	４．巻 1
２．論文標題 広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討 ： 衣・食・住生活概論の構想と成果	５．発行年 2020年
３．雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要．教育学研究	６．最初と最後の頁 136-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村上 かおり ，鈴木 明子，今川 真治，平田 道憲，松原 主典 ，冨永 美穂子，髙田 宏 ，梶山 曜子，金崎　悠	４．巻 2
２．論文標題 広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討―人間発達概論の構想と成果および家庭科内容構成の展望―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要．教育学研究	６．最初と最後の頁 115-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鈴木 明子，平田道憲，工藤 由貴子，岡 曜子，正保 正惠，佐藤 ゆかり，村上 かおり，松原 主典，髙田 宏 ，梶山 曜子，金崎 悠	４．巻 2
２．論文標題 広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討―多様な家政学専門家の意見に照らした課題と展望―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要．教育学研究	６．最初と最後の頁 124-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 鈴木 明子，平田 道憲，工藤 由貴子，岡 陽子，正保 正惠，佐藤 ゆかり， 村上 かおり，冨永 美穂子，梶山 曜子，今川 真治，松原 主典，髙田 宏，金崎 悠
２．発表標題 教科観の構築を目指す家庭科教員養成カリキュラムに関する研究 ―シンポジウム参加者の認識から捉える課題の整理―
３．学会等名 日本家政学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 鈴木明子，村上かおり，梶山曜子，今川真治，松原主典，冨永美穂子，高田宏
２．発表標題 家庭科教員養成における教科観の構築に関する研究-広島大学人間生活系コースにおけるカリキュラムの検討・改善をめぐって（３）-
３．学会等名 日本家政学会第71回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 鈴木明子，平田道憲，工藤由貴子，岡陽子，正保正惠，佐藤ゆかり，村上かおり，冨永美穂子，梶山曜子，今川真治，松原主典，高田宏，金崎悠
２．発表標題 教科観の構築を目指す家庭科教員養成カリキュラムに関する研究－シンポジウム参加者の認識から捉える課題の整理－
３．学会等名 日本家政学会第72回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 冨永美穂子，平田道憲，鈴木明子，村上かおり，今川真治，松原主典，高田宏，梶山曜子
２．発表標題 教員養成における教科内容学研究-各科教科内容構成の開発-理論的仮説と教科内容構成のシラバス「家庭」の理論的仮説とシラバス
３．学会等名 日本教科内容学会第６回研究大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 日本教科内容学会編（平田 道憲，鈴木 明子，村上 かおり，冨永 美穂子，今川 真治，松原 主典，高田 宏，梶山 曜子，金崎 悠）	４．発行年 2021年
２．出版社 あいり出版	５．総ページ数 284
３．書名 教科内容学に基づく教員養成のための教科内容構成の開発	

１．著者名 鈴木明子編著，（執筆協力）正保正惠，村上かおり，冨永美穂子，梶山曜子	４．発行年 2019年
２．出版社 東洋館出版社	５．総ページ数 165
３．書名 コンピテンシー・ベイスの家庭科カリキュラム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	今川　真治 (IMAKAWA SHINJI) (00211756)	広島大学・人間社会科学研究科（教）・教授 (15401)	
研究分担者	正保　正惠 (SYOUHO MASAE) (00249583)	福山市立大学・教育学部・教授 (25407)	
研究分担者	平田　道憲 (HIRATA MITINORI) (30111660)	広島大学・人間社会科学研究科（教）・名誉教授 (15401)	
研究分担者	佐藤　ゆかり (SATOU YUKARI) (40510813)	上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授 (13103)	
研究分担者	冨永　美穂子 (TOMINAGA MHOKO) (50304382)	広島大学・人間社会科学研究科（教）・准教授 (15401)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	工藤　由貴子 (KUDOU YUKIKO) (50331468)	日本女子大学・家政学部・研究員 (32670)	
研究分担者	梶山　曜子 (KAJIYAMA YOKO) (50781259)	広島文化学園大学・学芸学部・講師 (35412)	
研究分担者	岡　陽子 (OKA YOKO) (60390580)	佐賀大学・学校教育学研究科・教授 (17201)	
研究分担者	村上　かおり (MRAKAMI KAORI) (80229955)	広島大学・人間社会科学研究科（教）・教授 (15401)	
研究分担者	高田　宏 (TAKATA HIROSHI) (80403583)	広島大学・人間社会科学研究科（教）・准教授 (15401)	
研究分担者	松原　主典 (MATSUBARA KIMINORI) (90254565)	広島大学・人間社会科学研究科（教）・教授 (15401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関